

# 河合寸翁の甲斐紀行

富田志津子

はじめに

河合寸翁、姫路藩酒井家の家老である。膨大な借金で危機に瀕していた酒井家の経済を立て直した。その手腕は、米沢藩の上杉鷹山と並び称されている。また、河合寸翁は、学問所、仁寿山校を建て、藩士も百姓も隔てなく教育した。それは、幕末の姫路藩の志士につながるものであった。

姫路市に生まれ育ち、長く『姫路市史』編集に関わってこられた、熊田かよこ氏が、姫路市を定年退職された後、『姫路藩の名家老 河合寸翁』を出版された。日本史の上でも注目するべき人物に、郷土の研究者がスポットをあてたもので、今後の研究も楽しみである。

熊田氏は、仁寿山のある奥山村に住み、その地で、「河合寸翁講座」を開催するなど、寸翁の顕彰にとめておられる。この度、私に、寸翁の文学、とりわけ和歌について、寸翁講座で講義してほしい、と頼んでこられた。こちら、日本史は素人、姫路の生まれでもなく、寸翁については名前を仄聞していた程度である。しかし、熊田氏とは二十年近い友好関係があり、こちらも寸翁について勉強してみたいという気持ちもあって、お引き受けした。本稿は、講座に先立って、寸翁の文学作品を読み解いたものである。どこまで内容に迫ることができるのか、こころもとないが、寸翁の和歌、発句と紀行文をとりあげてみる。

まず、河合寸翁について、概説する。前掲の、熊田かよこ著『姫路藩の名家老 河合寸翁』（二〇一五年、神戸新聞総合出版センター）に拠っている。

生まれたのは明和四年（一七六七）、幼名、猪之吉いのきち。のち準之助はらのすけ、道臣みちのみ。諱は、定一さだいち、鼎かたなえ、元鼎もとかなえ。号は漢年かんねん、白水はくすい、寸翁すんわう。河合（川合とも）家は、酒井家の家老職であった。寸翁の祖父の時に不祥事があり家断絶の危機があったが、

父や叔父の功績がみとめられ、家老職を続けている。安永六年（一七七七）寸翁一才にして、当時の姫路藩主、酒井宗雅（忠以）に初めて謁見、天明七年（一七八七）父が死去して家督を継いだ。そして姫路藩年寄となり、宗雅に仕えた。二一才のときである。以後、家老となって酒井忠道、酒井忠実（たけみち）に仕え、六九才で隠居して寸翁と名乗った後も、若き藩主、酒井忠学（ただのり）を支えている。

寸翁の藩政改革は、七三万両に及ぶ姫路藩の借金を返済したことが、まず第一。藩の実収入の七倍余の金額のこの借金を、儉約や、特産品の栽培と販売など、様々な改革を行い、藩を富ませ、返済し得たのであった。また、財政改革の目途が付いたとき、藩主から隠居のための山一所を賜ることとなり、寸翁はそこに仁寿山校を建てて若者を集め、身分に関わりなく教育したのである。熊田氏によると、松岡操（柳田国男父）や河野鉄兜、菅野白華、秋元安民ら、有名な学者を輩出し、また幕末姫路の勤王の志士も多くここから出ている。寸翁は、天保一二年七五才で没、養子の河合屏山（へいざん）があとを継ぎ、勤皇派として明治を迎えている。

さて、姫路には多くの寸翁自筆文書がのこされている（姫路市所蔵）。それらの写真を見せてもらい、その中で、私が解説・翻字したのは、和歌、発句の入るものである。

寸翁は、歌人ではなく、文筆を職業とする人でもない。身分の高い武士の嗜みとして、漢詩を作り和歌を詠む。しかし日常的に詠んだわけではない。詠むのは、正月、年賀などのめでたいときや、人との贈答、行事に際してである。また、寸翁はよく旅をしている。姫路と江戸の往復はもちろん、大坂や京、そして奈良などへも物詣に行く。そんなとき、多くの和歌を詠んだ。その詠草が今も残る。また、紀行文も綴っている。それらは、武士の教養の範囲といえるものであり、文芸性の高いものは多くはない。しかし、読み込んでみれば、そこには、生身の寸翁の思いが綴られており、その人を感じることができる。

今回、取り上げるのは紀行である。寸翁は、江戸と姫路を行き来する際に、紀行を二つ残している。天保六年の旅と天保八年の旅である。二つの旅は、江戸を出て甲州街道を行くものである。

江戸時代に、江戸と京を結ぶ道は、大きな街道としては、東海道と中山道があった。大名行列は、ほとんどこの二つのルートのどちらかを通る。甲州街道は中山道の一部を、甲斐の山中の道に替えるもので、江戸の日本橋と信濃の下諏訪を結んでいる。街道の整備状況がよくなく通行者は少なかったようだが、なぜか寸翁は江戸から姫路へ帰るの

にこの道を選んでゐる。理由は、自身の和歌で「老ぬればかゞまるこしの見にくさに かひのかけみちかくれてぞゆく」(年をとって腰が曲がっているのがみにくいので、裏道の甲斐路を隠れながら行くことだ)と詠んでいるように、晴れがましいことを嫌って、老人はこちら、と「かけみち」(陰道)をとったようである。

二つの紀行のうち、天保八年のものは長文で、紀行文の中に和歌等が挟み込まれており、まとまりのある道中記である。大正一三年に河合大夫顕彰会が刊行した『河合寸翁大夫年譜』(以下「年譜」)に翻刻紹介されている。一方、天保六年の紀行には紀行文はなく、道中で詠まれた和歌、発句と詩が書き留められ、巻末に「甲斐紀行端書」が跋文のごとくに付されている。私は本論で、天保六年の甲斐紀行をとりあげる。それは、「甲斐紀行端書」に、当時の寸翁の心情が綴られており、是非、内容を読み込んでみたい、と思うからである。また、和歌や発句も、寸翁自作のものばかりで、興味深い。

この天保六年の詩歌と文章を、本論では「甲斐紀行」とする。それらは、懐紙に自筆で書かれ、こよりで閉じて一書とされている。表紙、表題などはない。

## 一

さて、「甲斐紀行」を最初から読んでいく。出発したのは、「年譜」によると天保六年九月二五日である。秋の終わり、すぐに冬を迎えることになる。江戸出立の折の文章はなく、冒頭は諏訪から始まる。寸翁は、上諏訪温泉に浴している。記事は以下のとおり(旧字体の漢字は現行のものになおし、濁点と句読点を付した。以下同じ)。

### 諏訪の出湯にて

すはの海の氷てわたす神なれば わきいづる水の湯ともなるらん

上諏訪温泉は、古来温泉地として有名であった。江戸時代の百科事典『和漢三才図会』(寺島良安編、正徳三年序)の「信濃」の項をみると、「上諏訪大明神 諏訪郡に在り」(本文は漢文。書き下し文は富田による、以下同じ)と上

諏訪神社が紹介され、諏訪湖は「諏訪湖 上諏訪の社前に在り。周圍三里、毎年小寒の後、堅く凍り海を塞ぐ。神獸有り、始めて氷の上を走る。人、足跡を見て 往来すること平陸の如し」とある。冬になると凍り、その上をまず神獸が走り、次に人が往来する。神獸とは狐のことらしい。『藻塩草』（宗碩編、室町期歌学書）に「すわのうみ 信州○氷のはしはちはやぶる神のわたりてとくるなりけり 彼海、湖也。此海悉氷りて人渡る事有ざれ共、上下の二神通り給ふ道斗一すちこほらぬ也。是神事の時の儀也」とある。『歌枕名寄』（澄月編、鎌倉期歌学書）にも「諏訪海」の項があり、「すはの海の氷のはしはちはやぶる 神のわたりてとくるなりけり」「すはの海の冬のかよひぢや神のむすべるちかひなるらん 知家」といった和歌が出ている。つまり、諏訪の海（諏訪湖）というと、氷の橋と諏訪大明神の神が、和歌に詠まれて来たのである。さらに、『夫木和歌抄』（長清編、鎌倉期私撰集）に「すはのうみの冬の里人われごとや こほりをふみて世を渡るらん 為家」のように、氷の上を歩く人も詠まれる。

寸翁の和歌は、冬になると諏訪湖が凍って、神や人が渡る、そんな不思議な諏訪だからこそ、水が湯となって出てきたのか、とする。寸翁の旅は、晩秋から初冬なので、まだ諏訪湖は凍っていないが、古歌を引き諏訪湖の本意、つまり氷と神を詠み込んでいる。目前の景でなく、和歌の伝統に従って詠んでいるのである。

二つ目は妻籠にて詠んでいる。ただし和歌ではなく俳諧発句である。

妻籠にて、ひるかれるし侍しに、江戸にてもらひし懐中味噌をなめ尽したりとも

うし侍りければ

かゝなめてふところみそも木曾のはて

懐中味噌は旅行用の携帯食。妻籠で「ひるかれる」（昼食）にしようとしたところ、懐中味噌をなめつくしてしまって、もうないと従者が言った。そこで詠んだ句である。俳諧なのでどこかに笑いを含む。ここは、古語の「かがなべて」（日数をかさねて）を「かがなめて」として、味噌を「なめる」と掛ける。駄洒落である。日を重ねて木曾の果てまで来て、携帯味噌もなめ尽くして果てた、と笑う。それにしても、この発句には季語がない。

みの、中道にて時雨にあひて

夕時雨みの、中みちきてぞおもふ 今朝こそすきし笠縫の里

「みのの中道」は、『歌枕名寄』『美濃国』に「美乃中道」の項目があり「あづま山みの、中道たえしより わが身に秋のくるとしりにき 曾根好忠」と載る。つまり、曾根好忠が「みの、中道たえし」と詠んでおり、古代にあつたが、いったん絶えたのが「みのの中道」のようである。寸翁の時代には復活していたのだらうか。

もう一つ詠み込まれている地名「笠縫の里」は、現大垣市、鎌倉街道の宿駅であつた。笠縫の山は、『夫木和歌抄』に「かさぬひの山 みの」とあり「旅人はみのうちらはひ夕ぐれの 雨にやどかるかさぬひの山 安嘉門院四条」の歌が載る（『藻塩草』にも）。笠というと雨が付きもの、夕時雨が詠まれることが多かったようだ。寸翁の和歌は、今朝笠縫を過ぎたのに、夕方になって時雨に遭ってしまった。今こそ笠が必要なのに、という。「笠縫」の地名に笠をかけている。そして、伝統的に夕時雨を詠んでいる。

車かへしの坂をすぎて、寝ものがたりといふところにて、いたく時雨ければ  
き、とれぬねものがたりの時雨哉

「車かへしの坂」は二条良基がここまで来て、車を返して帰つたという伝説の地。「寝物語」は、地名としては、美濃国と近江の国の国境にあつた里の名。普通名詞としては男女が寝て語らう話。ひそひそと聞き取れない寝物語と、時雨のかそけさを掛詞にする。わずかに降る時雨の音が、ここ寝物語の里では、男女の寝物語のひそひそ話のようである聞き取れない、という。季語は時雨で冬になる。このとき、すでに十月になっていたのであらう。

老曾の杜にて

霜しろしやつれ紅葉の下葉のみ おひそのもりにのこるいろかな

「老曾の杜」は、滋賀県安土町にある奥石（おいそ）神社の杜。時鳥の名所で、歌枕であった。『夫木和歌抄』「おいそのもり」では、「かがみ山たちのくかげも猶みえて おいそのもりにふれるしらゆき 雅有」と、鏡山とあわせて雪、つまり老いた白髪の姿を詠む。同じように寸翁の和歌も、老曾の杜は、霜が降りて真っ白で、つまり老いの白髪で、もう色あせた紅葉の下葉のみが色を見せている、と、やはり、老いと言えば白髪、白髪と言えば霜、と和歌の伝統的な連想で詠む。

## 鏡山にて

七十の老はかくれぬかゞみ山 我としら髪のかずかぞへ見む

「鏡山」は滋賀県南部、野洲町と竜王町の境にある山、ふもとに鏡宿があった。古くからの歌枕で、古今集「鏡山」いざたちよりてみてゆかん 年へぬる身はおいやしぬると 詠み人知らず」が有名。『夫木和歌抄』「かがみ山」の項に「雪ふればしらぬおきなのががみやま 松もさながらおもがはりせり 知家」のように、鏡山は老いた顔を映すものとして詠まれている。『歌枕名寄』には「老らくのかゞみの山のおもかげは いたゞく雪の色やそふらん 実能」の和歌を引いている。

寸翁の和歌は、鏡に映った七十の翁の老いは隠せない、さて白髪の数でも数えようか、とする。実能の和歌に拠って、鏡山に雪、つまり鏡に映す白髪、というパターンで詠んでいる。

以上が、天保六年の甲斐紀行に載る和歌と発句である。

寸翁の和歌は、囁目を詠まない。伝統的な詠み方を踏襲し、歌枕として詠まれてきた伝統に拠り、古歌を尊重し、旧来の詠み方に従って詠む。そのうえで、さらに自分らしきを出そうとしているのである。

一方、寸翁の俳諧発句は、気軽に詠まれている。彼の発句は掛詞を用いて笑いを誘う、つまり駄洒落である。しかし、歌詞や歌枕を詠む点、やはり伝統的な和歌に拠っている。

天保六年の甲斐紀行は、これらの和歌と発句のあとに、漢詩が出ており、さらに、跋文が「甲斐紀行端書」（以下「端書」として付けられている。漢詩は省略する。その後の文章（端書）は、当時の寸翁の心情を吐露していて、興味深い。全文を以下に掲出する（傍線と番号は富田が付した）。

天保六年九月 甲斐紀行端書

このとしの春、<sup>①</sup>ねがふがまゝに致仕のことゆるされて、かの<sup>②</sup>すみだ河のほとり、ことゝふ都鳥、船がよほふ渡守にまじらひて、月をも花をもまつべきものゝ、なをことありて、<sup>③</sup>しろしめす播磨の国府、みやこの館、浪華のたちへもまいりものせよ、との仰蒙りぬ。このこと早ふ国府よりもさたありしに、<sup>④</sup>姫君御産のこと近くありぬべければとて、御所方よりもかたくとゞめさせ給ふ事侍しに、かしこくも九月の十三日と申に御産達の如くましまして、若君さへ生れさせ玉ふ。上中下のよろこび、いはんかたなし。われらがごときは、老たるあしをそらに履のはのおるゝばかりよろほひいでつ??（虫損）こひなきさへ人にまさりて、なにとも、えいひいでぬを、君は、老たる身のよろこびにたへで、いかゞあらんとあやうがらせ玉ふも、いとかしこし。御所にての御よろこびも大方ならで、かの翁いかばかりよろこびぬらんと仰ありなど、うちゝよりのつたへに、うけ給るもいとゝかしこし。邦の榮、千万づこれにますべきことやはある。まして<sup>⑤</sup>この年ごろ、おほやけのおほんおほへたくひなふおはしまして、すたれたるをもおこし、旧にもこえて、松の葉のしげき御めぐみに竹の小枝の末までもさかへさせ玉ふことのうれしさ。この上は、たゞ若君をさへみあげ奉らんことゝぞねがふがうへのねがひなりに、七十の齡たけたる身には、是こそいかゞおぼつかなきことのかぎりならめとばかりおもひたるに、げに老ずはけふにと思ふにも、くわはうゆゝしき身の齡なりけりと、おもへばゝ胸をどり舌ふるへておさゝ麻がらのよふしたる。

⑥ほそくみじかきすやり、ただ一すぢぞもたる、立居さへ心ゆかぬ老が身には、これとても無用のものなれど、ともに立る侍ども、それどもてあつかふになくてやはあるべき。また、関所々々ののりなどし侍らんにも、いかゞとあらんとてこそ、⑦あはれ世をのがれたらんうへは、簪を負ひ笠を戴き、古の西行、長明なんどのあとをもしたひ、野にも山にもふし、柴の露をもはらひ、かさに縫ふ萱の根のなが路をも、たゞひとりゆかんこそ、ほいならめど、なを君の禄を食むみのさまでは、やつしうべきにもあらず。また⑧石湖の范氏が蜀の国へ遊び、京口の郭氏が杭州へゆきたるやうに、おもふがまゝに神の祠古き寺などまうて、伝へたる宝ら、遣せる書などさぐり見、また苦むせる巖に穴すまぬする操高き人もあらんには、世にけがれたる心をも洗ばやとおもへど、これもまた主じもたる身は往來のみちにもさだまりありて、やどる日数さへもかぎりあるなれば、かなふべきにあらず。さりとて、⑨人廉將軍にあらざる身の、たけくしくひきつくるひ、ことくしくいで立んは恥あることのかぎりよとて、人うとき甲斐の國に路をとりてたどり行

⑩老ぬればかゞまるこしの見にくさに かひのかけみちかくれてぞゆく

⑪めぐみある御代にあふみはけふまでも いきたるかひのしらねのみかは

以上が、「端書」全文である。傍線部分を、以下に注釈する。

①ねがふがまゝに致仕のことゆるされて、

「年譜」に「天保六年乙未六十九歳・・・三月八日隠居差許サル」とある。寸翁はこの年の三月に退隠し、養子小太郎が家督を相続し、隠居料二百人扶持を受ける。

②すみだ河のほとり、こと、ふ都鳥、船がよほふ渡守にまじらひて、月をも花をもまつべきもの、

隠居に際して、酒井家隅田川屋敷内に百八十五坪の地所を賜り、自由にせよとの達しがあつた。寸翁はそこに墨水精舎をいとなむ。隅田川は、『伊勢物語』九段に「武蔵の国と下つ総の国との中にいと大きな川あり。それを隅田川といふ・・・渡守に問ひければ、これなん都鳥、といふをききて・・・」とあり、その文章から「都鳥」「渡守」が



連想される。隅田川のほとりに隠居して、花鳥風月とともに暮らしたいのだが、そうもいかない。

<sup>3</sup>しろしめす播磨の国府、みやこの館、浪華のたちへもまいりものせよ、との仰蒙りぬ。

「年譜」に「天保六年・・・九月二十五日江戸出立、甲州路ヲ経テ諏訪神社ニ詣テ、木曾路旅行、京都大坂ニ立寄、十月十八日帰着ス」とある。京、大坂を経て姫路に戻れと、上からの命令があった。

<sup>4</sup>姫君御産のこと近くありぬべければとて、御所方よりもかたくとゞめさせ給ふ侍しに、かしこくも九月の十三日と申に御産達の如くましまして、若君さへ生れさせ玉ふ。

藩主酒井忠学の妻喜代姫は、將軍、徳川家斉の娘であった。その喜代姫が男子を産んだのである。寸翁が、姫路へ旅立とうとしているとき、殿の奥方、喜代姫の御産となり、とどめられた。そして、待つ甲斐あって、九月十三日に男子が健やかに産まれた。

<sup>5</sup>この年ごろ、おほやけのおほんおほへたくひなふおはしまして、すたれたるをもおこし、旧にもこえて、松の葉のしげき御めぐみに竹の小枝の末までもさかへさせ玉ふことうれしき

「おほやけ」は、徳川幕府、そのおほえがめでたいのは、喜代姫のことなどもあっただろう。寸翁は、この現在の栄えがうれしく、幾久しく続くことを願う。

<sup>6</sup>ほそくみじかきすやり、ただ一すぢぞもたる、立居さへ心ゆかぬ老が身には、これとても無用のものなれど

「すやり」は、素槍。穂先のまっすぐな槍で、十文字槍などに対していう。寸翁は道中素槍を一本持っていたらしいが、老いた身には、それさえ重荷であった。

<sup>7</sup>あはれ世をのがれたらんうへは、箆を負ひ笠を戴き、古の西行、長明なんどのあとをもしたひ、野にも山にもふし、柴の露をもらひ、かさに縫ふ萱の根のなが路をも、たゞひとりゆかんこそ、ほいならめど

「筭」は難読文字だが、「笈」のことであろう。笈は、旅行時に背負う物入れ。山伏や行脚僧が使用した。

西行は、平安から中世にかけて生きた歌僧。全国を行脚して回り、和歌を詠んだ。歌集に『山家集』がある。『西行物語』等、一代記が江戸時代によく読まれた。長明は、西行と同じ頃の隠者。歌人だったが、隠遁して、日野に閑居した。随筆『方丈記』などを著している。また、旅をして『東関紀行』を書いた、と信じられていた（じつは間違い）。つまり、西行や長明の後を慕う、というのは、旅をしたい、それも仕事にせかされる旅ではなく、己れの氣の向くまま、歌を詠みながらの一人旅をしたいのである。

「菅の根」は長いものたとえて（夏の日のすがのねよりもながきをぞ 衣ぬぎかへくらしわびぬる「曾丹集」）、  
「なが路」を引き出す枕詞。野山に伏しながら、長い道のりを旅したい、という寸翁の夢は、西行のような旅の詩人を理想とするのかもしれない。

⑧石湖の范氏が蜀の国へ遊び、京口の郭氏が杭州へゆきたるやうに、おもふがまゝに神の祠古き寺などまうで、へたる宝ら、遣せる書などさぐり見、また苔むせる巖に穴すまるる操高き人もあらんには、世にけがれたる心をも洗ばやとおもへど、

「石湖の范氏」は南宋の官吏、范成大。詩人として有名であり、また旅をして紀行文も著した。著書に「石湖集」、詩集に「石湖詩集」などがある。「京口の郭氏」は、元の郭畀。画家で、とりわけ山水画が有名。酔いに任せて筆を揮ったという。両者とも、日本ではそれほど著名ではない。寸翁が、范氏や郭氏のことを知っていたというのは、漢詩文や漢字に詳しくたことを示すのである。

さて、寸翁は范氏や郭氏を理想とする。おそらく両者の旅は風流の旅で、漢詩を作り山水画を描きながらの旅、と寸翁は羨ましく思っていたのだろう。寸翁の旅の関心は、古い寺社や、そこに伝わる文書や遺物にある。また、岩屋に籠もって修行するような孤高の行者と語らって、己の心の穢れを洗いたいとも願う。しかし、そうもいかない。

⑨人廉將軍にあらざる身の、たけしくひきつくろひ、ことしくいで立んは恥あることのかぎりよとて、人うとき甲斐の国に路をとりてたどり行

「人廉」は「一廉」で「ひとかど」、ひとときわ優れていることである。相当な武将でもない自分のような小者が、ものものしい出で立ちで旅をするのは恥である、と述べる。寸翁は謙虚である。姫路藩の重職にありながら、東海道のような人の往来の多い街道より、人の少ない甲州街道を行きたいのである。甲州街道は、五街道の一つで、江戸日本橋を起点として、内藤新宿から甲府を経て下諏訪に至り、中山道と合流する。

老ぬればかゝまるこしの見にくさに かひのかけみちかくれてぞゆく

寸翁詠の和歌。屈まる腰、つまり老いて腰の曲がった姿を恥じて甲斐路をとった、とする。東海道は晴れの路であつたにちがいない。

めぐみある御代にあふみはけふまでも いたるかひのしらねのみかは

これも寸翁の和歌。お上のご恩でよい時代にあいながら、今日までは生きる甲斐を知らなかったが、今一身にそのご恩を感じるのだ。「近江」「甲斐」「白根」という、道中の地名を入れて、掛詞にして詠んでいる。「めぐみある御代」は將軍様の御代か、酒井公の御代か。おそらく直接のお上、酒井公のことであろう。

この文章には、寸翁の本音が縷々述べられている。老いた身にうれしいのは、やはりお家の繁栄であつた。將軍家から迎えた奥方に若様が産まれ、お家は興隆、末々まで繁栄するであろう。これは寸翁にとって、何にも勝る喜びである。自身は、退隱を何度も願ひ出て、ようやく許されたものの、実際には、まだまだ藩の政治をみてくれ、と言われる。隅田川のほとりに隠居所をつくり、花鳥をめでて暮らしたいが、そうはいかない。京、大坂へ寄つて、姫路に帰国せよとの命令が出る。旅と言へば、西行のような歌を詠みながらの行脚をしたいが、自分の旅は公務、そうもいかない。侍達を連れての、ものものしい旅である。せめて晴れがましい東海道は避けて、甲州の山陰の路を選んで行く。

これは、寸翁の酒井家への思い、隠居への願望が著された文章である。

おわりに

天保六年「甲斐紀行」は以上である。姫路藩という大藩の政治家として腕を揮った寸翁、その心奥に秘められていた思いが、「端書」に綴られている。藩の繁栄と長久を願う一方で、自分自身は隠遁をのぞむ。彼の心には、隠者への憧憬があった。しかし、お上が許してはくれない。そんな状況がよくわかるのである。

一方、寸翁の和歌は、伝統的な事物を伝統に則して詠んでいる。とくに上手でもなく、ありきたりともいえるが、これは、寸翁が正統な和歌を習ったことを示すのであろう。

〔付記〕 熊田かよこ氏から、多大な学恩を蒙った。記して謝するところである。

# The Account of Sunnou Kawai's Trip

Shizuko TOMITA

Sunnou was Karo of the Himeji clan in the late Edo period.

He reconstructed the Himeji clan which faced the economic crisis. He is famous because his skill in politics and finance is appreciated.

However, his literary works have been rarely introduced.

This article took up Waka, Haiku, and the account of a trip Sunnou wrote. I analyzed the work he wrote when he travelled from Edo to Himeji so as to approach Sunnou's personality.